

神樂坂で

ひとりごと



目次

スポーツクラブの憂鬱	I	6
トンボロでお茶を		12
ピーコックブルー		18
ランチタイム・コンサート		24
けんちゃんそばかうどん		27
男っぼくおじさん化？		32
体に一番いいこと		37
今一番欲しいものは		43
奇妙な人たち		46
源氏物語にふれて		50
クオリアに惹かれて		58
アトリエにて		63
好きな季節の頃は		71

神楽坂の街を歩く	I	75
神楽坂の街を歩く	II	79
カラー		89
ちよつと一休み		93
美的別れかた	I	99
美的別れかた	II	112
女ひとり		119
むかしの夏		127
ほうろく灸		134
スクラップの記事から		139
もうパンプスは履けない		146
レオンのひとりごと		152
スポーツクラブの憂鬱	II	161

神楽坂

神
楽
坂
で
ひ
と
り
ご
と

スポーツクラブの憂鬱

I

涼子は一人疲れきった体を支えるように、JR飯田橋駅西口の改札を出て右に曲がり、神楽坂下にたどりついた。

肩からは大きなスポーツバッグをさげて、まだ少し湿り気の残った髪を結んでいた黒いゴムをほどきサラッと風にその髪を流した。

肩まで伸びたその髪は細くしなやかで、午後の陽を浴び少しカラーリングした色は素敵につややかな色合いになっていた。

八月も終わり、九月になってもまだまだ日中は残暑の暑さが残っている。

ああー早く涼しい秋にならないかなあと、ひとり涼子は心の中で思っていた。



なんだかいつもこの交差点で信号待ちをしていると、この仕事、今のスポーツクラブで仕事のことを考えてしまう。いつまでこの仕事をやっていくのかしらと。なんだか自分にはこんなジムのインストラクターなんかずっとやっていいのだろうか。他にもっとやるべき事があるのではないか。

そう思う日々が最近増してきたように思う。

ポーッとそんなことを考えている自分は、なんとも言えない虚しさにおそわれるのだ。そして今日もまたこの場所のため息のひとつがでてしまう。

もう何年経ったかしら。新宿のスポーツクラブのインストラクターになってから。もともとはそんな仕事をするつもりはなかった。

東京の女子大を卒業して、それほど大手ではないが出版社に就職した。一応の編集全般の仕事の知識を身につけ数年間はそこで仕事に就いていた。

平凡な日々の連続で特に仕事に対する意欲もなかった。ただ忙しさは並大抵ではなかった。だからおそらく考える余裕もなかったように思う。

その会社がこの先の西五軒町にあったので、昔からこの神楽坂の町に馴染みがあった。会社が終わったアフター5には、同期で集まり色々な店を開拓していたので、自分なりに

知り尽くした街であったかもしれない。

O L達が働くいわゆる銀座、丸の内、新宿、渋谷とは違い、それほど広くない街の中に、魅力を感じる飲食店や雑貨のお店が色々あり、お手軽な値段で楽しむことができるのも気に入っていた。

路地裏の狭い空間もまた好きだった。

まるで京都にでもいるような気分になる。まさかここが新宿区の中にあるなんて。昼間の主婦グループが退散したあとの静かな夜のかくれんぼ横丁もまた好きだった。

今はこうしてジムが終わった夕方方の時間帯なので、昼間ここを散策したおば様たちが数多く歩いているのを目にする。

皆楽しそう！ おば様方は数名のグループで横に広がりながら坂を下ってくる。きつと最近雑誌やテレビで取り上げられたお店の散策と、評判のイタリアンかフレンチを楽しく味わい、最後にお茶タイムで盛り上がって本日は終了となるのであろう。

交差点を渡り、坂を少し上がった右手に甘味で有名な「紀の善」がある。

この抹茶ババロアは最高に美味しい。熱い日本茶と軽なおせんべいが少し付いてくるので、きつとおば様方は「美味しい！」を連発して本日最後の締め甘味を頂き、さらにさらに話題はつきないのだろうか。

もともと体を動かすのはきらいではなかった。出版社を数年でやめてからは自らジムに通い体形を維持することのみ考えていた。

汗を流しひたすらマシーンで鍛えて、シャワーを浴びるとなんともいえない爽快感に満たされた自分がいた。

きらいじゃないんだわね、こういう自分が。

そんな時、インストラクターを目指す人の講習会の記事を目にし、あまり迷うことなく講習会に参加して、さらに資格まで取得し今に至ったのだ。

気が付いたら立場が逆転し自分は指導するほうになっていたのだ。

むしろ好きかもしれない。人に教えるにはより一層自分を磨かなくてはならない。そういう体に鍛えあげなくては。

無駄のないボディになっていく自分の姿を鏡でみると、なぜか満足感で一杯になった。ほどほどの腹筋のついた体、つまんでもわき腹のお肉はもはやつかめないほどになった。いった。

パンツを履いた時に下がってないヒップラインと、キツと締まった足首が涼子は自分でも好きだった。

こればかりは鍛えて作り上げたものでなく、生まれつきのものだった。たぶんおばあさんになってもきつとこのままだろうなあと思っていた。

そのキツと締まった足首につけているピンクゴールドのアンクレット。

日焼けした足を見事キュートに演出してくれている。

同じ頃一緒にインスタクターになった仲間は、何年か経つと皆それぞれ残るものもいれば、他のもつと条件のよいジムへと散らばっていったメンバーも多くいた。

そうかもしれない。

決して高いともいえない給料だもの、少しでも条件のよいほうに傾くのに決まっている。

体を思いのほか酷使するし、あとになってその疲れがどつとでてくるのも最近になって前より増した気がするのだ。

無理もないよ、30歳をもう越えているんだから。

その疲労感からの立ち直りが若い時と違い、明らかに遅いということなんだから。

事実だものね。

このままこの仕事を続けていくこと対していつも不安を抱えていた。そんな気持ちを中心の中に抱えこみながら、今日もまた神楽坂の坂を上がっていく。

上り坂は時にはつらく感じるときもあった。

でもこの町が涼子は好きだった。

坂の途中で新しいお店を発見するとたまらなく嬉しくなり、疲れなんか忘れて店の中を一周し、今日はなぜか可愛い携帯ストラップを買ってしまったのだった。

トンボロでお茶を

小さな入り口のドアを静かに開けると同時にさっと中を見渡した。

ラッキー！と内心想った。

カウンターの一番右側の席が空いている。

道路に面したこの席は大抵いつもふさがっていた。常連客はこの席をまず確保するのだろう。本を開いて一人になりたいとき、現実から自分を切り離したい時、何かもの思いにふけりたい時、この席がもっとも適しているからだ。

ここに来る時はお気に入りの本を持ってこなくてはだめだと、初めて訪れた時にそう感じた。神楽坂の表通りから一步入った路地にあり、あたりは静かな普通の住宅地なので、



入り口のドアを開けるのには少し勇気がいった。

でも一歩中に踏み入れるとそこは全く別の世界で、その空間だけは静かに時間が流れていて、誰にも邪魔されない自分だけの空間を確保することができた。

椅子を静かに引くと木のきしむ音が床から伝わってくる。

窓際の席から外の景色が見え、店の方に目をやりながら歩いて行く人の姿がちらほら見える。

本当にどこにでもある路地裏の住宅の中の一軒家だ。だから見逃してしまいそうになるのも無理はない。

その席に座り道行く人をぼんやりと眺める時間もまたいい。

目の前にはモノクロのオードリー・ヘップバーンのポートレートが静かに微笑んでいる。若い頃の魅力的なオードリーだった。なぜか懐かしさに心がふるえた。耳ざわりでない軽いジャズの音楽が店の中にあふれている。

なんだか日常から非日常へと変わる時間が感じられる。日常の不必要なことやつまらないうことを頭から切り離し、ここで美味しいコーヒーだけを味わう為だけにこの店はあるのではないかと思う。

あまり人に宣伝したくないなあ。

自分だけのお気に入りの店がひとつあってもいいのではないか。

カウンターのの中からコーヒートの芳しい香りがしてきた。

ほどよい香りにあたりが包まれた。古くて多少大きめのコーヒーマルは、オードリーの写真の左側に置いてある。

カウンターのの中の棚にはコーヒーマグカップ、それらはシンプルなデザインとカラーで整然と並べられていた。ここも安心するくらいのオーナーの細やかさと繊細さが伝わってくる配置であった。

ご夫婦であろう二人が、カウンターのなかで特に会話することもなく、注文があると忠実にコーヒートを美味しくいれることにだけエネルギーを注いでいるかのように思える存在に感じた。カウンターに座るとすべてその店の心のようなものを感じる気がして、一人の時はなるべくそこに座るようにする。

コーヒートも酸味か苦味かを選べるようになっていた。

どちらだろう。

今まであまりこだわらずいつもブレンドと一言発していた。なんだか知らない店でもこれがいちばん外れがないかと思いつつ、無難であるかの様な思いこみで。

本当のコーヒー通は銘柄を指定するのだろうか。

その日は昼も過ぎ午後の一時を過ぎていたのでメニューを見てトーストセットにした。以前自分の隣の席の人がこのセットを食べているのを見たからだ。

トーストの他にサラダとポテトが蒸してある様なものと、小ぶりのウインナが添えられていたのが妙に印象的だったのだ。ごま風味のドレッシングのようだ。ジャムも少し添えられていた。それらがワンプレートに収まっている。

なんだか女性は多分こういう小綺麗なランチなら好きだろうと思う。

熱いコーヒーが目の前に置かれた。

じつにいいタイミングだ。

「ミルクは入れますか？」

「いいえ結構です」

と今日は言えた。初めて来た時はさすが「はい」と答えたのを覚えている。

コーヒーには必ずミルクと頭にあつたから。でも本当にコーヒーの味を堪能するなら、ミルクなしでストレートに味わわなくてはならないということがここに来てわかったのだ。

美味しいものはそのまま十分その価値が発揮できているのだから。